

コメニウスの保育思想に関する一考察

—「母親学校」と「幼児期の学校」を中心に—

五十嵐裕子*

要約

コメニウスは、教育が万人に必要であると考え、「あらゆる人に、あらゆることを」学ばせる汎知主義を唱えた。『大教授学』では貴賤貧富の別なく進学できる1歳から24歳までの単線型の学校体系を提唱し、乳幼児期の教育こそ大切であるとして、1歳から6歳までの乳幼児に「母親学校」を構想した。「母親学校」は「学校」と称しているが、母の膝の上で母親を教師として行われる教育を意味する。『汎知学』では生涯教育論を展開し0歳から6歳の乳幼児に「幼児期の学校」を構想した。ここでは6歳までの幼児を6つの発達段階に区分しており「発達段階への自覚の萌芽」をみることができ、コメニウスは幼児同士の交流を評価する一方、教師の力量不足から集団保育には否定的だったが、「幼児期の学校」では集団保育を容認している。幼児の指導では遊びを重視し、直観教授法を主張し『世界図絵』で具現化した。コメニウスの思想はその後の保育思想に大きく影響を与えている。

キーワード コメニウス、汎知主義、母親学校、幼児期の学校、直観教授法

目次

はじめに

1. 中世ヨーロッパにおける子育て
 - 1-1 共同体の中での成長と生活
 - 1-2 乳母養育とスウォドリング
2. コメニウスの生涯と子ども観
 - 2-1 コメニウスの生涯
 - 2-2 人間観と子ども観
 - 2-3 幼児教育・保育の意義
3. 学校体系と「母親学校」の構想
 - 3-1 コメニウスの学校体系
 - 3-2 「母親学校」の教授内容と教授方法
 - 3-3 「母親学校」の特殊性
4. 生涯教育論と「幼年期の学校」
 - 4-1 コメニウスの生涯教育論
 - 4-2 「誕生前の学校」と「幼児期の学校」の構想
 - 4-3 集団保育について
5. 直観教授法と幼児教育・保育の指導方法
 - 5-1 あそびの重視
 - 5-2 直観教授法
 - 5-3 『世界図絵』

おわりに

はじめに

子どもを育てる子育て、保育という営みは、人類の歴史とともに始まり、それぞれの時代の制約や社会の要請の中で、変化して現在に至っている。古代ギリシャの都市国家スパルタでは強健な身体づくりのために幼児に冷水浴や上半身裸の生活をさせて保育を行っていたし、自由都市アテネでは、健全な心身の育成に向けて、遊びを取り入れた保育が行われていた^[1]。しかし子どもの生死・身の振り方に関する権利は親や国家が握っており、子捨てや子殺しも親や国家の意向によって行われていた。中世や近世においては、キリスト教による「性悪説」に基づき、幼い子どもに対しても、子どもの発達段階と生活環境の違いを無視した、鞭による厳しいしつけが行われていた。当時はこのような考え方が一般的であり、宗教改革者ルター（Martin Luther：1483-1546）でさえ「ムチによって父親はわが子を地獄から救い出すことができる」と説いていたのである^[2]。子どもを「子ども」として認識する見方はまだ存在せず、子どもは、大人を基準に「小さなおとな」「未熟なおとな」「役立たず」などと見なされていたのである。このような時代に、ルソー（Jean-Jacques Rousseau：1712-1778）がその著『エミール』（*Emile*）の序文で「人は子どもというものを知らない。（略）かれは子どものうちに大人を求め、大人になるまえに子どもがどういうものかを考えない」と述べ^[3]、「子どもの発見者」と呼ばれていることはよく知られているところである。だが、ルソーよりさらに遡る17世紀、ヨーロッパの「全般的危機」の時代に宗教の統一とヨーロッパの平和を熱望し、そのための担保として次代を担う子どもの教育に注目したのがコメニウス（Johann Amos Comenius：1592-1670）である。本稿では、コメニウスの幼児教育・保育思想、特に子ども観や保育理論について「母親学校」や「幼年期の学校」を中心に概観し、その意義について考察する。

1. 中世ヨーロッパにおける子育て

1-1 共同体中での成長と生活

中世から18世紀末に至るヨーロッパでは、避妊の処置がとられなかったこと、子どもには現代の年金や保険としての役割が期待されていたこと、生存率の低さから親より長生きをして老後を保障してくれる子どもを確保するためには複数の子どもが必要であったこと等から、子どもの数が非常に多かった。しかし人口の大部分を占める農民層や手工業者層では、家族は生活を維持することが精一杯で、構成員を保護できるほど強力な組織ではなかった。そのため家族が過剰な子どもたちの負担から解放されるために、大部分の子どもたちは、依存状態から半依存状態に移行する7～8歳になると、富裕な世帯の召使いか非公式の徒弟として労働に従事するために親元を離れた。

子どもの過半数は、多くの奉公人と親族で構成された「拡大家族」や共同体のなかで大人と一緒に働き生活を共にしながら、生きる術を学び成長していった。一部の特権エリート層においても、7歳になると男子は小姓として仕えながら騎士教育を受けるために宮廷に、女

子は教育のために修道院に、聖職者を目指す子どもは聖職者教育のための僧院（ラテン語）学校に送られた。

1-2 乳母養育とスウォドリング

7歳になるまでの乳幼児期はどうであったかという、乳幼児はただ手のかかる厄介者であり、その時期が早く過ぎることを期待されるだけの存在であった。中世社会では2歳以下の乳幼児は、神の意志で生まれ、神の意志で死ぬ、人間とは違った生物であると考えられ、仮に幼くして死んでも大人から悲しみや哀れみを受ける対象ではなかった^[4]。母親が乳幼児の子育てに関心をもつようになったのは近代になってからのことである。

中世では労働の足手まといとなる乳幼児は、生まれるとすぐにお金を払って遠く離れた田舎の農家に預ける、という乳母養育の方法が多くとられた。農家も貧困による経済的理由から他家の子どもを里子として預かるものの、不潔な環境と不注意な育て方により2歳になるまでに死んでしまう子どもの方が多かった。当時の子育て慣習はスウォドリング（swaddling）と呼ばれる、包帯状の布で子どもたちをぐるぐる巻きにして放置しておくという育て方で、特に農村地帯では頻繁にみられた。乳母が外出する際には巻き産着で包んだ子どもを釘につるしておくこともあったという。子どもたちは手足を動かすことも、何かと戯れることもできず、また周囲のおとなからあやされることもなく育てられたのである。

アリエス（Ariès, Philippe : 1914-1984）は、このような乳幼児、子育てに対する無関心状態が変化したのは、16世紀から17世紀にかけてであると述べている^[5]。未だ乳幼児期に関心がもたれなかった時代に、コメニウスは、すべての子どもには年齢と能力に応じた教育が必要であると考え、6歳までの幼児期を教育制度の中に位置づけ、乳幼児の独自の特徴から遊びを中心とした教育の意義、感覚や直観、生活を通じて学ぶ教育の方法を主張した。あまりに先駆的で進歩的であったコメニウスの改革論は当時は全体として理解されることはなく、その一部が受け入れられたに過ぎなかったと評価されている^[6]。

2. コメニウスの生涯と子ども観

2-1 コメニウスの生涯

コメニウスは、現在のチェコ共和国に生まれ、チェコ語名はコメンスキーという。17世紀の西洋での最大の教育思想家であり、学校教育の改革者である。

コメニウスは、ヨーロッパにおける宗教改革運動家の最初の烽火となったフス（Hus, Jan. : 1370頃-1415）の宗教運動やその発展としてのボヘミア同胞教団に属する家に生まれた。両親はコメニウスが10代の早い時期に亡くなったが、コメニウスは両親の属していた教団附属学校でラテン語教育を受けて、ドイツで学んだ。ドイツではヘルボルン大学で神学を学び、百科全書派の哲学者アルステッド（Johann Heinrich Alsted : 1588-1638）からのキリスト再臨百年統治信仰説に接して共感するとともに、ラトケ派の学者の教授改革案によってラトケ（Ratke, Wolfgang, : 1571-1635）の教育に触れた。さらにハイデルベルグ大学で学び、1614

年に帰国して教会附属学校の教師、教団の牧師、そして教団経営の学校の校長として活動した。だがプロテスタント諸派とカトリック勢による三十年戦争（1618-1648）勃発によって、教団は解散を余儀なくされ、コメニウス自身も国外退去令を受け、放浪の末、1628年ポーランドのリッサ（Lissa）に亡命した。

リッサでは領主の庇護の下で教職を引き受けるとともに、『開かれた言語の扉』（1628稿）、チェコ語の『教授学』（1632稿）、ラテン語訳の『大教授学』（1657）、『神的光に照らした自然哲学綱要』（1633稿）、『事物の扉』（1641稿）等の著作を著し、ヨーロッパ全土に名が知られるようになり、イングランド、オランダ、スウェーデンなどに招かれて教育に従事した。三十年戦争は1648年に終結したものの、コメニウスが熱望した祖国復興は認められず、ハプスブルグ家支配の同胞教団は永久国外追放となったため、その後もコメニウスはヨーロッパ各地を流浪し、1658年にはハンガリーで、やがて世界各国語に訳され広く欧米に普及した『世界図絵』を著した。その後もポーランドやドイツを転々とし、祖国の解放と帰還を夢見ながら、1670年オランダにて客死した^[7]。

2-2 人間観と子ども観

コメニウスは、人間は神の似姿として創造されたがゆえに、他の被造物（生物）に比して卓越した存在であり、生来あらゆるものの知識を獲得する能力、すなわち学識（人間と世界のあらゆる事柄を知ること）の種子、徳行（あらゆる事柄と自分自身を統御すること）の種子、敬神（万物の源泉である神に自分自身とあらゆるものを秩序づけること）の種子を備えているとし、人の究極の目的は来世で神とともにある永遠の命を得ることにあるが、そのため神が人間に与えた役割は、学識と徳行と敬神の追求に努力することであり、それが人間の本務であると考えた^[8]。ここから「あらゆる人に」教育が必要であるという理念が導かれる。コメニウスは、「もしも人が真の人間となるべきであるならば、彼は教育されなければならない」「人間の人間たる所以のものに於いて、訓練せられた者でない限り、何人といえども人間と呼ばれることはできない」^[9]と述べており、神と人間においては現実社会での階級や貧富、性、民俗などは捨象され、「教育は実に万人に対して必要なもの」^[10]とされたのである。

コメニウスの人間観は、被創造物の中で最も高く最も絶対的で卓越した存在であり、来世での永遠の命の獲得のために教育されるべき存在であるという、キリスト教的人間観であるが、子ども観もそのような人間観に基づいている。乙訓は、コメニウスの子ども観を、コメニウスの言葉を引用しながら以下のように紹介している。「幼子は、この上もなく高価な、神の賜物」であり、「幼子を自分自身のものではなく、神の幼子、神のために産み出された幼子として、私たちが尊重すべきである」。なぜなら子どもは「私たち自身の本質から生じ、私たち自身と同じ」であり「私たちの後に続く世界の住人…相続人、となる」存在であるからである。そのため「自分のために抱く情愛と尊重を、幼子に対して抱くのは、私たちの義務」であり、「幼子は、親にとって、銀、金、真珠、高価な宝石よりも高価なもの」^[11]であ

る。また乳幼児期は「柔軟であって、外界から来るあらゆる印象を受容するに適して」おり、「幼少の頃に於いて、人を正しい知恵の標準に合するように形成するという事は極めて賢明なこと」であり「人間の全生涯に於いて必要なすべてのものは、早くこの最初の学校に於いてこれを植えつけねばならない」^[12]とする。

2-3 幼児教育・保育の意義

井谷は、コメニウスの代表的著作『大教授学』第7章より、以下の言葉を引用して、コメニウスの考える幼児教育・保育の意義とその重要性を紹介している。「人間の場合、ゆるぎのないもの、消え去らぬものは、人生の最初の時期に吸い込んだものだけです。このことは、似通った例を見ればわかります。陶器が新しいうちに吸い込んだにおいは、こわれるまで残ります。樹木は、柔らかな若木のうちにこずえを上下左右にひろげたそのままの姿を切り倒される日がくるまで、何百年も持ち続けるのです。毛織物が初めに吸い込んだ染色はとけがたく染めかえはききません。曲げてから堅くなった輪たがをまっすぐに戻そうとすれば、たちどころに幾千の破片に砕けてしまいます。同じように、人間の場合でも最初に刻みつけられたものが、完全に定着するのですし、これを考えることは奇跡に近いのです。したがって、人生の最初の時期からすぐ始めて、本当の知恵の道を刻みつけてやるのがこの上なく望ましいのであります」^[13]。

コメニウスは、戦争で祖国を去らなければならなかった体験から平和への願いを強く抱き、そのためには教育が重要な役割を果たすと考えた。母国復興の際に、母国への最良の贈り物にしたいと考えて「あらゆる人に、あらゆることを、あらゆる面にわたって」学ばせる教育の内容と方法を考案した。人間共通の知識体系による社会改良を啓蒙するべく、コメニウスは汎知主義（pansophism）の思想を打ち立て、その中で乳幼児教育についても取り上げられたのである。

3. 学校体系と「母親学校」の構想

3-1 コメニウスの学校体系

三十年戦争で多くの国々を流浪し、各地で子どもたちの悲惨なありさまを目にしていたコメニウスが提唱したのが、貴賤貧富の別なく進学できる単線型の学校体系である。コメニウスは、その著『大教授学』において、人間が誕生してから成熟するまでに25年を要すると考え、乳幼児期から24歳に至るまで教育が継続されるように、表1のように各段階を6年とした4つの階梯に応じた学校の設置を構想している。コメニウスがこの時代に、複線型の学校体系を排して、単線型の学校体系を構想したことは、非常に先駆的であったといえよう。

表1 コメニウスの発達段階区分と学校体系

発達段階区分	学校体系	教育の目的
乳幼児期 (1～6歳)	母親学校	さまざまな物事を見、聞き、触れ、味わうことを通して、「外部感覚」の対象と交わり、識別する習慣をつける。
少年期 (7～12歳)	母国語学校 あるいは初級学校	文字の読み書きや絵の描写、歌うことや数を数えて何かを計測することを通して、「内部感覚」(写像力と記憶力)及び内部感覚を表現する器官である手と舌の訓練をする。
青年前期 (13～18歳)	ラテン語学校 あるいはギムナジウム	感覚で集めた物事について「それは何か?なぜか?」を問うて得られた知識と技術を通じて、認識力と判断力を磨く。
青年後期 (19～24歳)	大学及び旅行	調和を保つ意志を培う(神学では魂の調和を保つ能力、哲学では精神の調和を保つ能力、医学では肉体の生命機能の調和を保つ能力、法学では利益の調和を保つ能力を培う)ことがめざされた。

出所: 今井康雄編『教育思想史』有斐閣 p.89-90、乙訓稔『西洋近代幼児教育思想史』東信堂 p.8-9
を参考に筆者作成

3-2 母親学校の教授内容と教授方法

「母親学校」は「学校」と称されているが、0歳から6歳までの子どもが「母親の膝」の上で、母親を教師として行なわれる基本的な学習のことを意味しており、必ずしも就学をしているわけではない^[14]。母親学校ではさまざまな物事を見、聞き、触れ、味わうことを通して、「外部感覚」の対象と交わり、識別する習慣をつけることが教育の目的とされている。

内容としては「形而上学、自然学、光学、天文学、地理学、編年史、歴史、算術、幾何学、計重学、工作労働、弁証法、文法学、修辞学、詩、音楽、家政学、政治学、倫理学、宗教」^[15]と、驚くほど広範な知識内容が盛り込まれ、これらの初歩的な知識や概念を理解することが教育の目標や内容として考えられている。学科の名称は少年期の母国語学校をモデルにしているため大仰な科目名となっているが、教授内容は幼児に無理のないものであったと、藤原はコメニウスの言葉をひきながら以下のように説明している。例えば「編年史」では時間、日、週、年を理解させる、「歴史」では何がきっかけに何が起こったか、あのことこのことについて思い出させる、「算術」では多い・少ない、「幾何学」では大きい・小さい、長い・短い、広い・狭いを問題としている。教え方も子どもの自発性や自発的活動を重視し、たとえば「工作労働」では「ものをあちらこちらに動かしてみる、いろいろに並べてみる、組み立てたり、結び合わせたり、ほどいたり等々、この年頃の子どもが面白がってやるとおりにさせておく、そしてそれをやっている最中に教えていく、というところから始まる」とし、「知りたいという子どもの自然な気持ちを抑えることなく伸ばしてやるという原則が貫かれていることに注意しなければならない」としている。倫理学については「①ほどを知ること、②清潔、③目上の人への尊敬、④いつけられたことの実効・遵守、⑤真実をいうこと、⑥正義の心、⑦友愛、⑧仕事に没頭する訓練、⑨始終おしゃべりをせずにはじめをつけること、⑩忍耐力、⑪他人に奉仕する心、⑫動作の上品さ」の12項目があげられ、これらが徳行に就いての知識(倫理学)のたしかな土台になるとされている。宗教学では教理問答の

主な項目のうち、年齢に応じて呑み込める箇所や実際に練習できる箇所を暗唱させるとされ、「子どもの発達段階に即ちした教育が主張されている」とされている^[16]。

教授内容について、コメニウスは「学校では、あらゆる者はあらゆる事柄を教わらなければならない」と述べているが、「あらゆる事柄」とはどのように認識、把握したらよいのだろうか。コメニウスは、あらゆる知識は1つの有機的連関をもち、個別的な知識は論理的に知の有機的全体と調和的に結合しているとする百科全書的思想^[17]、あるいは汎知学の考え方に立ち、雑然としたこの世界のさまざまな事柄もその秩序に則れば認識することが可能と考えていたのであろう。コメニウスは、「世界を正しく認識したうえで、正しく語り、行為することができる人間こそ、17世紀当時の社会的混乱に終止符を打ち、新たな社会を創造しうる行為者になりうる」^[18]と考えたのである。戦争により祖国を追われ、亡命先でも戦火で大切な手稿や家財を焼失したコメニウスは、教育改革をととして社会改革を志向していたことがわかる。

3-3 母親学校の特殊性

藤原は、コメニウスが母親学校とそれ以降の学校との相違、母親学校の特殊性について、その著『大教授学』において2点あげていることを指摘している^[19]。まず1点目は、「両親の場合は家庭の用事があるため、学校のような順序を、そんなに精密に守るわけにはいかない」ということであり、もう1点は「子どもの知能の発達や学習への熱意のあらわれ方はまちまちであり、2歳でよく口がまわりどんなものにも生き生きとした関心をもつ子どもがあるかと思えば、5歳になってもそうはならない子どももいる」ということである。コメニウスはこのことについて「この幼児期の最初の教育は、全体として両親の思慮に任せるしか仕方がない」と述べるとともに、同書において両親及び乳母のための手引書と、子ども用の小さな絵入りの本を刊行することを予告している。前者の両親および乳母のための手引き書が後述する『母親学校の指針』であり、後者の絵入りの本が『世界図絵』である。

4. 生涯教育論と「幼児期の学校」

4-1 コメニウスの生涯教育論

コメニウスは『大教授学』においては24歳までの学校体系を4段階とし、6歳までの子どもの学校を「母親学校」としたが、別著『汎教育』では誕生前から死に至るまでを8つの段階に区分し、「誕生前の学校」「幼児期の学校」「少年期の学校」「若年期の学校」「青年期の学校」「壮年期の学校」「老年期の学校」「死の学校」の8種類の学校を構想しており^[20]、『大教授学』に比べて『汎教育』では、学校の範囲が生涯にわたって壮大に拡大されていることがわかる。コメニウスの生涯教育論は、外的要因と内的要因の双方から構想されたとされ、外的には、三十年戦争の終結による祖国解放の絶望とそこから生じた現実主義的な観点がコメニウスに生涯教育構想を思い立たせ、内的には汎知学の体系化による教授学の拡充によりこれまでのコメニウスの研究の中から生涯教育構想の機運が生じていたとされる^[21]。

4-2 「誕生前の学校」と「幼児期の学校」の構想

ここで乳幼児期の教育、保育に関連するのは「誕生前の学校」と「幼児期の学校」である。「誕生前の学校」には「人類の最初の慎重な世話に関する、両親への有用な知識」という副題がついており、両親の親としての自覚、責任、教育的配慮が述べられている。コメニウスは「善く生まれ、善く生き、善く死ぬこと」を人間の幸福の3つの鍵としているが、善く生き、善く死ぬためには、その前提としての「善く生まれる」ことが欠かせないことから、子どもが健全な身体と精神と感覚をもって生まれてくるように、結婚、妊娠、出産において人的環境の決定的要因となる両親への助言が、身体の健康、胎教、遺伝、母乳哺育などの観点から詳細に論じられている。コメニウスの子どもの教育・保育への関心が必然的にその子どもを生き育てる親の教育へと向かったとともに、「汎教育」の観点から、それまで教育の枠外にあった大人が教育学的思考の射程に加えられたのである^[22]。藤原はこのことについて、井ノ口の『汎教育』に至って、人間は教育する課題を負った存在であるというおとなの側の教育の責任の自覚にまで深化され、それと同時にこれまで教育論の枠外にあったおとなの生活と課題一般の考察が新たに教育学的思考の射程に組み入れられた^[23]という指摘を紹介している。

幼児期の学校は、『大教授学』における幼児の学校と同様に、1歳から6歳を想定した学校であり、「母の膝」との別名がつけられているとおり、家庭での教育が主に想定されている。「幼児とは、この世に新しくやってきて、全てに未成熟であり、あらゆる面において教育を必要とする新人である」とし、子どもは無限の可能性を内在しているが学んだものしか認知しないのであるから、幼児期の教育は後の段階の教育のためにも大きな意味をもつこと、また最初の教育の失敗がその人間の全生涯にわたってそれをとまなうことから、この時期の教育の重要性を説いている。

コメニウスは表2のように6歳までの幼児をさらに6つの発達段階に区分し、各段階の特色や意義を示している。年齢で一律に区分するのではなく、コメニウスが子どもの実際の姿を観察することによって得た知見を基に区分をしたことが推測されるが、このことは当時では画期的なことであったと考えられる。この区分について、藤原は「コメニウスの教育内容に関する記述を年齢段階ごとに書き抜いてみると、おもしろいことに気づく。それは、年齢による発達段階の区切り方である。コメニウスは直線的に、明確に線を引いているわけではない。各科目に即してそれぞれ独自に学習課題を設定しているのだが、全科目を通してみれば、大局的には、1歳と2歳の間、3歳と4歳の間大きな区切りをしているように感じられる。ついで小さな区切りが2歳と3歳の間、4歳と5歳の間でなされており、5歳と6歳はほぼ同じ発達段階としてとらえているようにみえる。ここにほんやりとではあるが、発達段階への自覚の萌芽が感じられる」と述べ、「発達段階への自覚への萌芽」には大きな意義が見いだせることを指摘している^[24]。最終段階の4歳～6歳の段階では、家庭の枠を超え、一人の母親が自宅を開放して地域の子どもたちを集団的に保育するという、今日の保育施設の原型ともいえる学校像が示され、コメニウスはこの学校を「半ば公の学校」と位置づけて

いる。

表2 幼児期の学校のクラス区分

I. 新生児のクラス (1か月半)	・この世の新参者に対して祈りにより、洗礼により、よき教育を開始する。
II. 乳児のクラス (1か年半)	・母親からの授乳により、心に内面的なものを形成する。しかし貴婦人は、乳児を健康で上品かつ敬虔な乳母に託してもよい。
III. 喃語と歩行のクラス	・知ることと同時に話すことを教え、事物を示し命名させる。歩行ができるようになる。「活動的な生活が真実の生活である」ので、運動的遊びをすすめる。甘やかせずに健康と抵抗力を養う。「すべてを為すことにより為す」を重んじ、「遊びは真面目な仕事への前戯である」ことに留意する。
IV. 言語と感覚のクラス	・認識力の中で、かつて感官の中に存しなかったものは皆無であるから、全生活の指導も感覚教育からはじめる。最初の印象が一生を支配するため、無用、誤謬、無神をとりあげないように留意すること。まだ詳細な事物の認識が困難なので、実物を提示して説明する。
V. 道徳と敬虔のクラス	・「模範→教示→訓練」を通して、家庭環境における両親の教育的感化が重要である。両親は子どもを教会に引率し、神について話し、祈り、そしてその方法を教えなければならない。訓練は鞭の罰に頼ってはいけない。
VI. 最初の共同の学校	・尊敬できる婦人の監督下で集団的に保育することによって、子どもたちは互いに交わり集団や共同生活を楽しみ、遊び、歌い、数え、善い習慣を身につけ、敬虔心を養う。読み書きをすることなく、感覚と記憶力の訓練をして、公の学校への準備をする。

出典：生田貞子、石川昭義、水田聖一編著『保育実践を支える保育の原理』福村出版 2012 p.54、藤原幸男「コメニウスにおける幼児教育論の展開」『琉球大学教育学部紀要第一部・第二部 (33)』1988.9 p.199を参照に筆者作成

4-3 集団保育について

コメニウスの幼児教育論は、『教授学』（1628～1632年執筆）、『大教授学』（1633～1638年執筆）、『母親学校の指針』（1629～1632年執筆）、『汎教育』（1657年～執筆）において論述されている。1630年代までの著作では、6歳までの幼児は各家庭で直接母親が教育することが理想とされているが、『汎教育』では必ずしも母親による教育に固執していないという変化がみられる。

『母親学校の指針』でコメニウスは、「たとえ乳母や親が子どもを少なからずうまく育てられるとしても、このすべてにおいて、彼らと同年齢の子どもたち、すなわち、喋ってくれる者であれ、一緒に遊ぶ者であれ、仲間の子の方がもっとうまくできるということを言い添えておきましょう」「子ども同士で集まり、街路で一緒に遊んだり走り回ったりすることは、毎日ではあっても、させておくだけではなく、させるように工夫しておくべきことでもあります」^[25]と、幼児同士の交流の大切さ、意義を強調している。

その一方で、幼児の集団保育については「私は6歳以前に母の膝から離して、教育してもらうために教師に任せるのは、次の事情からお勧めできません」とし、その理由として「余りにも幼稚な時代には、子ども集団全体を世話し、それに働きかける様に受け持たされても、

教師一人ではやって行けず、それよりも、養育したり気をつけてやることの方が必要であるからです。ですから、その子にとっては、実母の膝にいる方がまだ良いのです」^[26] としている。つまり、母親による養育の優位性は、コメニウスにとっては、集団全体に働きかける教師の力量の低位によって成立しているに過ぎなかったと考えることができる。

『汎教育』においては、前節でみたように、幼年期の学校の最終段階、4歳から6歳の子どもについては、家庭の枠を超えて集団的に保育することが提唱されている。コメニウスが集団保育を容認するに至った契機としては、①母親が働きに出ている間、就学前の子どもを小学校へ送り出すボヘミア同胞教団の経験、②ボヘミアの独立を認めないというウェストファリア条約が締結された中で自主独立の基礎としての職業生活が重視され、幼児にも自主独立が期待されたこと、③そもそもコメニウスの教授法は「愉快に、容易に、確実に」という『大教授学』以来の原則があり、それには個人教授より集団教授の方が適していること、④汎知学校の成功がその試みを幼児期まで拡張させたこと、⑤母親の教育からすぐ小学校に進ませるのではなく、集団での経験的教育から系統的教育に緩やかに移行した方がよいのではないか、等があげられている^[27]。

5. 直観教授法と幼児教育・保育の指導方法

5-1 あそびの重視

コメニウスは『母親学校の指針』（1663稿）において、健康、理解力、行為と作業能力、言語能力、道徳教育、宗教教育の章を設け、幼児教育の指導方法について具体的に論じている^[28]。各章の内容と方法の概略は表3に示すとおりだが、コメニウスはいずれにおいても、「学習は労働ではなく、本とペンを使った遊びであり、砂糖以上に甘いもの」であると子ども自身が認識し、就学に向けて学校や学習への熱意をもち、自発的な心の備えをする必要があるとしている。さらに子どもが5,6歳になるまでの教育は子どもが理解できることのみにとどめ、すべて遊んでいるかのように行うようにと「遊び」を重視し、強調するとともに、遊具の利用についても説かれている。

表3 幼児教育の内容と指導方法

健康	<ul style="list-style-type: none"> ・ 母親の胎教や、授乳や離乳食など乳幼児にふさわしい食生活が大切である。 ・ 実母による授乳は子どもにとって身体的にも精神的にも優れている。 ・ 1歳までのあやしには「楽器」を用いる。3歳前後の遊びでは快いものに目をとめさせて感覚を楽しませ、目や耳の感覚を刺激する。
理解力	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自然界を歩かせて体験させたり、目で観察させることによって事物の識別をさせ、事物を示しながら言葉で名称と概念を一体化させる。 ・ 寓話や空想的な話も子どもの知能や理性を育むので話して聞かせる必要がある。 ・ 遊びの場で子どもが悪習に染まらない様に道徳的な配慮が必要である。

行為と作業能力	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児は活動を好むので、幼児の活動を尊重し、模範を示して合理的にできるように援助する。 ・ 危険なもの以外は自由に使わせ、肉体を健康に、精神を鋭敏に、肉体の器官を敏捷で機敏なものになるよう育む。 ・ 算数の初歩として3歳児までに5から10くらいまで数えられるようにする。4～6歳で20くらいまで順序正しく数えられるようにする。 ・ 計算を教える必要はなく、数の大小や偶数・奇数の識別ができればよい。子どもは2歳くらいで図形の大小や長短、4歳までに図形の区分、円や線、十字架と尺度の名称などを覚え、やがて測量などをするようになる。 ・ 子どもは音に関心があるので、3歳までにメロディーやハーモニーの鑑賞内で適度に音楽を提供するとよい。5歳までには小曲や讚美歌を歌わせる。リズムやメロディーが理解できるよう家族と一緒に歌うとよい。
言語能力	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「理性」と「言葉」は人間固有のものであり、文法や修辞法が言語能力を育成する。 ・ 2～3歳では短く発音しやすい単語の発音練習、4歳でアクセント、5～6歳で語彙を豊かにする。言語の練習には「遊戯」が効果的である。 ・ 1～2歳までにジェスチャーや動作でコミュニケーションできるようにし、3～5・6歳で「比喩」や「模倣」による言語の意味づけができるようにする。 ・ 子どもは言葉を覚えるに伴いハーモニーとリズムを楽しむようになるので、3・4歳までは遊びの中で童謡を歌い、5・6歳までに短い詩を暗唱させると言語能力はさらに進歩する。
道徳教育	<ul style="list-style-type: none"> ・ 道徳指導は、絶えざる実例、適時の分別ある忠告、程よい懲戒で行う。 ・ 中庸、気遣い、従順、正直など徳目の指導は、家庭でのおとなの配慮があれば教え込みや強制的懲戒は必要ない。 ・ 諭しや懲戒といった第一段階の理性的な処罰だけでは子どもが改心しない場合は、粗野で自分勝手な子どもが育たないように「小さな鞭」や「手で殴る」という第二段階の懲戒が必要となる。 ・ 「中庸」では過度の美食を避け、3歳ころまでに身だしなみができるようにする。 ・ 「正直」では、事実を事実として話す習慣をつけさせる。 ・ 過度の可愛がりや甘やかしが排除されていれば子どもは我慢が当たり前になるので、泣き叫んでも気にしない。 ・ 2～3歳までのわがままや強情は何か別のことに熱中させることで矯正する。
宗教教育	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもにささやかな理性があらわれる2歳頃から年長者の祈る姿に触れさせ、実例を示しながら短いお祈りが言えるように教える。 ・ 3～5歳で少しずつ長いお祈りが言えるようにし、6歳までに親と一緒に短い詩を唱えられるようにする。

出所：乙訓稔『西洋近代幼児教育思想史』東信堂 2010 p.10-14を参照に筆者作成

5-2 直観教授法

これまでみてきたように、コメニウスは、「子どもの感覚を具体的事物に触れさせることによって事物の認識は訓練され、知識は正しく完全に獲得されていく」「事物を示しながら言葉を添え、概念と名称を一致させていく」という指導方法を繰り返して述べている。これは、子どもの経験的知覚、感覚的知覚を重視し、知識は視覚（目）から始まり、聴覚（耳）と触覚（手）の連携のもとで表象され理解されるべきであるという直観教育の主張であり、その教授法は直観教授法と言われる。コメニウスは、ギリシャやローマの古典に教養の源泉を求

めて言語や文体の形式にこだわり、内容の伴わない事物の暗記や決まりきった章句の問答に終始していた当時の文献中心主義の学校教育に対置するものとして、直観主義教育を掲げたのである。

5-3 『世界図絵』

このような直観教授法を具現化したのが、『世界図絵』である。これは世界で初めての絵入りの教科書であり、当時の子どもたちの読み物として評価されて各国語に翻訳され、時代や地域によって新たな事柄や知識を付け加えたり古い部分を削除したりしながら読み継がれてきた^[29]。コメニウスは、『世界図絵』は「世界の事物と人生の活動におけるすべての基礎を絵によって表示し、名付けたもの」であると説明している。その構成は百科全書的であり、世界にあるさまざまな事柄が細かく分類・整理され、コメニウスが考える一定の秩序のもとに再構成されている。『世界図絵』では「世界」を150の内容に分類・整理されている。1. 神、2. 世界、3. 天空……から始まり、自然の動植物、人間の身体、諸々の職業、社会的生活の事柄、学校関係、倫理や勤勉等と展開され、149. 神の摂理、150. 最後の審判となり、神に始まり神に終わる一連の世界が示されている^[30]。

『世界図絵』ではまず各アルファベットの発音と文字を一致させながら覚えられるように、音を思い浮かべやすく記憶しやすいさし絵とともに説明の言葉が示されている。例えば「Aa」のページにはカラスの絵と「カラスはアーアー (aa) 鳴きます」という文章、「Bb」のページには羊の絵と「ひつじはベェーエーエー (beee) となきます」と文章が書かれている。この動物のアルファベットの後には、先述の世界の項目150が、すべて「項目名と図絵と説明文」という形で示されている。読み手は、図絵の中の事物の数字と説明文の中の単語の数字で、事物の図絵と言葉を結びつけて、図絵（概念）と言葉を一致させていくわけだが、まさに感覚（視覚）を通して事物を具体的に直観的に捉えることを目的とした教材であるといえる。『世界図絵』は読み書きをはじめて学ぶ子どもたちの教科書として位置づけられるとともに、図絵に対して母国語とラテン語またその他の言語の対訳をつけたものも多く出版されている。このようなコメニウスの感覚を重視する考え方はさまざまな実物教材や教育メディアを活用する現在の教育方法に通じるとともに、乳幼児教育や保育の方法原理の原点となっている。

おわりに

子どもを人間として認め、すべての子どもに教育を受ける権利があるとする主張は、18世紀のルソーまで待たなければならなかったが、コメニウスは、6歳で将来の職業のための中等教育を選別する当時の複線型の学校体系に反対して、年齢や資格に基づいた単線型の学校体系を唱えたことで、一般に開かれた民主的な学校体系の主唱者として評価されてきた。

幼児教育、保育の領域では、『母親学校の指針』で述べられている幼児教育・保育の原理は、フレーベルの幼稚園やベスタロッツの「ゲルトルートの居間の教育」に近いものであり、

フレーベルやペスタロッチの源流として位置づけられる。またコメニウスは、子どもの発達段階から幼児期の教育では言葉や抽象的な概念よりも感覚の訓練と事物の認識を重視し、絵と言葉を結びつけた、世界で最初の教科書『世界図絵』を刊行した。これは世界で最初の絵本とも言われ、子どもの興味や関心に寄り添う形で編まれている。

乙訓は、この世界図絵の作成から、「コメニウスはルソーより100年余り前の『子どもの発見』の先駆者であり、文字通り子どもの理解者であった」と評価している^[31]。コメニウスの考える幼児教育・保育は、子どもの発達に応じて子どもの感覚を通して実施される幼児教育・保育であり、言葉そのものを教えるのではなく、言葉と事物を関連させて教える幼児教育・保育であった。そして乳幼児期における遊びを、無駄な行為ではなく、子どもの発達に必要な活動であると論じた主張は、現代においてもそのまま通じるものであり、その先駆性、進歩性が読み取れる。

コメニウスの「子ども」に関する認識は、のちのジョン・ロック、ルソー、ペスタロッチ等に、また保育に関する理論はペスタロッチやフレーベル等に受容され、その後の保育思想の発展に大きく影響を与えたのである。

注

- [1] 三宅茂夫編『新・保育原理－すばらしき保育の世界へ－』（株）みらい 2014 p.46
- [2] 江藤恭二監修『新版子どもの教育の歴史 その生活と社会背景をみつめて』名古屋大学出版会 2011 p.17
- [3] 当時『エミール』は、神を冒瀆するものだと教会や政府から激しい批判を受け、ルソーはフランスから、スイス、ドイツ等への逃亡生活を余儀なくされた。
- [4] P.アリエス 杉山光信・杉山恵美子訳『〈子供〉の誕生 アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房 1980 pp.40-41 アリエスは、「モンテーニュは自分の子供の数も自分の妻が何回子どもを産んだかも、正確に言うことができなかった」こと、モンテーニュの「私はまだ乳呑み児であった子供を2, 3人亡くした。痛恨の思いがなかったわけではないが、不満は感じなかった」という言葉、子供をみな乳児期に亡くしたモリエールが作中で記した「小さい者は数のうちに入らない」という言葉をあげ、子供に対する「この無頓着は、この時代の人口学的な条件から直接に引き出される避けがたい帰結であった」と分析している。さらに「洗礼も受けず死んだ子供を、家の中、敷居、庭に埋葬する習慣が、バスク地方ではきわめて長いこと残っていた」ことから、「生まれてあまりにあえなく死んだ子供は、今日、家畜や犬や猫が埋められるようにところかまわず埋葬されていたのだろうか。子供はそれほど取るに足らぬ存在で、生活に深く入りこんではいなかった」ことを指摘し、子供は「あまりにも目減りが大きく」、「消耗品として考えられて」いたとしている。アリエスはまた、「人間一生の図」の扉の版画に注目し、「メリアンは幼児たちを、幼児たちが抜け出てきた地下の世界と、まだかれらが入り込んでいない人生との間であって、「人生二入ラントスル者達」の銘をうたれた柱がそれらを隔てている中間の地帯に位置させる構図をとっている」ことを紹介している。
- [5] 同書 pp.41-47 アリエスは、このことについて「死んだ子供の肖像画が16世紀に出現した」ことをあげ、「人口学的にみて生命の浪費されたこの時期に、生き残るにせよ死んでしまったに

せよ」「もはや子供が避けがたい消耗品として考えられてはいいないこと」「匿名状態から子供たちが脱け出たことを示している」としている。またアリエスは、「子供の肖像画よりもずっと古い歴史を持つ家族の肖像画が子供を中心にした構図をとる傾向を見せるのも、また17世紀のことである」とし、「16世紀末から17世紀にかけて」乳幼児に向けられる関心が進化したと指摘している。

- [6] 江藤、前掲書 p.18 同書ではコメニウスがラルケとともに「初期の不運な教育改革者たち」と呼ばれたことが紹介されている。
- [7] 小澤周三・影山昇・小澤滋子・今井重孝『教育思想史』有斐閣 2011 pp.64-66
- [8] 今井康雄編『教育思想史』有斐閣 2014 pp.87-89
- [9] 乙訓稔『西洋近代幼児教育思想史 - コメニウスからフレーベル - [第二版]』東信堂 2010 p.5
- [10] 同書、p.5
- [11] 同書、p.6
- [12] 同書、pp.7-8
- [13] 井谷喜則「幼児教育の源流Ⅴ コメニウスの幼児教育思想」『幼児教育』第72巻第6号 日本幼稚園協会 1973.6 p.58
- [14] フランスではコメニウス以来の伝統的な名称を用いて、公立幼稚園のことを「母親学校」(Ecoles maternelles)と称している。
- [15] 待井和江編『保育原理』ミネルヴァ書房 2014 p.17
- [16] 藤原幸男「コメニウスにおける幼児教育論の展開」『琉球大学教育学部紀要第一部・第二部 (33)』1988.9 pp.195-196
- [17] 百科全書思想は、コメニウスの学生時代の師であるアルシュテットの『百科全書』(1649)やカンパネッラの『太陽の都』でも展開され、ベーコンやアンドレーエ、ラトケなどコメニウスが影響を受けた作家たちにも共有されていた思想であり、知恵の樹のイメージを伴って、あらゆる知識の系統的分類と体系化とを可能にする発想である。
- [18] 今井康雄編『教育思想史』有斐閣 2014 p.92
- [19] 藤原、前掲書、p.196
- [20] 生田貞子、石川昭義、水田聖一編著『保育実践を支える保育の原理』福村出版 2012 p.52
- [21] 藤原、前掲書、pp.198-199
- [22] 同書、p.199
- [23] 井ノ口淳三「コメニウスにおける幼児教育論の展開とその背景」『京都大学教育学部紀要』第22巻 1976 P.29
- [24] 藤原、前掲書、p.197
- [25] 同書、p.198 (原典はコメニウス(藤田輝夫訳)『母親学校の指針』玉川大学出版部 1986 p.62)
- [26] 同書、p.198 (原典はコメニウス(藤田輝夫訳)『母親学校の指針』玉川大学出版部 1986 pp.104-105)
- [27] 同書、p.200
- [28] この乳幼児段階の教科書『母親学校の指針』が著された頃、コメニウスはちょうど2人の娘の子育て期にあり、この時期乳幼児期の教育に関する著作が多く刊行されている。
- [29] 文豪ゲーテも、子ども時代に『世界図絵』に接したことを著作の中で回想している。
- [30] 石井正司「コメニウスにおける直観教授」『奈良教育大学紀要【人文・社会科学系】』第21巻第1号 1972 pp.199-200
- [31] 乙訓、前掲書、p.22

参考文献

- J.ルソー 今野一雄訳『エミール』(上)(中)(下) 岩波文庫 1999
- P.アリエス 杉山光信・杉山恵美子訳『〈子供〉の誕生 アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』
みすず書房 1980
- P.アリエス 中内敏夫・森田伸子訳『「教育」の誕生』藤原書店 1992
- 今井康雄編『教育思想史』有斐閣 2014
- 小澤周三・影山昇・小澤滋子・今井重孝『教育思想史』有斐閣 2011
- 乙訓稔『西洋近代幼児教育思想史 -コメニウスからフレーベル- [第二版]』東信堂 2010
- 中谷彪・小林靖子・野口祐子『西洋教育思想小史』晃洋書房 2013

Summary

Consideration of Comenius' Thoughts on Childcare and Education — With a Focus on *Mother School* and *School of Infancy* —

Yuko Igarashi

Johann Amos Comenius set up the idea of pansophism to teach *everyone everything in all aspects*. In the late 1630s, he advocated the single-track school system from 1 to 24 years old that anyone could go on to the next state of education and envisaged the *Mother School* for babies and toddlers aged 1–6. In the late 1650s, he envisaged eight types of school in which a human life span was divided into eight and envisaged the *School of Infancy* for babies and toddlers aged 1–6. At the *School of Infancy*, infants aged up to 6 were further divided into six developmental stages. He thought that education during the period of baby and toddler was important.

With regard to the method of teaching in infant education, Comenius emphasized the importance of *play*. And he published *Orbis Pictus*, to embody the intuitive teaching method. It is a textbook for children with illustrations and is the world's first picture book. Comenius' thoughts had a significant influence on the subsequent development of the thoughts on childcare and education.

Keywords Comenius, Pansophism, Mother School, School of Infancy,
Intuitive Teaching Method

(2015年11月12日受領)